

詩編 110 : 1

ルカによる福音書 22 : 63～71

【前奏】

【招詞】 詩編 95 : 6～7

【祈祷】

【聖書】 詩編 110 : 1、ルカによる福音書 22 : 63～71

【説教】「神の子」

<預言の成就>

22章の最後の部分です。この次から23章に入りますが、そこではいよいよイエスさまの十字架の死が語られます。今日の聖書箇所は、その前に、ユダの裏切りによって、ユダヤ人の指導者たちに捕らえられたイエスさまが、暴行を受けられる場面と、ユダヤ人の最高法院で裁きを受けられる場面が語られています。

暴行を受けた。裁きを受けた。これらのことは、旧約聖書のイザヤ書53章に語られていた、「主の苦難の僕」の姿が、イエスさまにおいて実現した、ということを示しています。

イザヤ書には、このような預言がありました。「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ 多くの痛みを負い、病を知っている」。他にも、その僕が「刺し貫かれた」、「打ち砕かれた」、「懲らしめ」を受けた、「苦役を課せられ」た。そういう言葉が並び、そして、「捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた」と書かれています。

そのようにイザヤ書では、すべての罪人を救うために、神に遣わされた主の僕が、お一人ですべての罪人の罪を自ら担い、死んで、多くの人の過ちを担う。背いた者のために執り成しをする、ということが語られています。

神の御子イエスさまは、神さまに遣わされ、すべての人を救うメシア、救い主として、この世に来られたお方です。しかしそれは、多くのユダヤ人が期待してきたような、強く雄々しく輝かしい王として、ヒーローのように人々を救う救い主ではありません。

イエスさまは神の御子であられながら、人々を救うために、その神のご栄光を捨てて、まことの人となり、イザヤ書に示されていたように、誰よりも弱く、小さく、貧しくなられました。そして、苦しみを受け、裁かれ、すべての人々の罪をご自分の身に担い、ご自分の命を投げ出すことによって、すべての人の罪を贖って下さる。ご自分の苦しみと死を通して、わたしたちを救って下さる。そのような、主の苦難の僕として歩まれるために来られた、メシアなのです。

<暴行を受ける>

さて、今日の箇所を改めて見てみましょう。63～65 節に、見張りをしていた者たちが、イエスさまを侮辱し、殴ったりして暴行を加える場面が語られています。この「殴る」というのは、「鞭打つ」とも訳され、棍棒や鞭で打つ、という意味です。

そして 65 節には、「そのほか、さまざまなことを言ってイエスをののしった」とありました。この「ののしって」と訳されている言葉は、「冒瀆する」という言葉です。本来は神に対する人間の態度として使われます。

ここで福音書の著者であるルカは、まことの神の御子であり、神から遣わされたメシアである、そのイエスさまが、まさに人々から冒瀆される、そのような仕打ちを受けたのだ、ということをお伝えしようとしているのでしょう。

<最高法院の裁判>

そして、夜が明け、最高法院での裁判が始まりました。最高法院というのは、ユダヤ人たちの間で、宗教的な事柄に関する権威を持つ、最高機関です。66 節の「民の長老会、祭司長たちや律法学者たち」というのは、この最高法院を組織するメンバーです。最高法院では、ユダヤ教における宗教的な事柄を裁き、決定を下します。それこそ、神への冒瀆罪であったり、律法違反であったりです。

しかし、当時の最高法院がその力を発揮できるのは、ユダヤ人の中の宗教的な面においてのみでした。当時、ユダヤの地域はローマ帝国が支配していましたから、政治的な判断や、死刑などの重い量刑を科すような事柄においては、ローマ帝国の決定がなければならなかったのです。

ですから、イエスさまをどうにか亡き者にしたいユダヤ人指導者たちは、まず自分たちの最高法院で、このイエスという人物が死刑に相当する者だ、ということを確認させ、その上で、ローマ総督のピラトの下へ訴え出て、ローマ帝国によって正式にイエスさまに死刑判決を下してもらおうとしているのです。

<メシア、神の子>

さて、最高法院がイエスさまに問うたことは、二つのことでした。まず一つ目は、「お前はメシア（救い主）か」ということ。そして二つ目は、「お前は神の子か」ということです。

イエスさまは、神から遣わされた救い主、メシアなのか。イエスさまは、神の子なのか。

この答えは、「その通り」です。まことにイエスさまは、神から遣わされたメシア、救い主であり、まことの人となられた、神さまの愛する独り子です。

このことは、これまで旧約聖書の預言の成就によって、そしてイエスさまのこれまでの御生涯によって、語られた御言葉によって、なされた御業によって、十分に証しされてきたことでした。

しかし、ユダヤ人の指導者たちは、イエスさまがメシアであり、神の御子であるということ、信じたくないので。受け入れたくないのです。ハナから違うと決めてかかっているのです。

彼らからすれば、イエスさまは、とても鼻持ちならない奴でした。ナザレの田舎から出て来たイエスという者が、自分たちの権威にまさる、神の権威を持つと主張している。そして、人々の指導者である自分たちが、神さまの御心に従っていないと言って、その過ちや罪を指摘してくる。論争を仕掛けても、言い負かされる。しかも、安息日に人を癒したりして、律法を破ることもあった。それなのに、人々に勝手に神のことを教えて、多くの支持を得ていました。

そんなイエスさまは、ユダヤ人の指導者たちにとっては、殺したいと願うほどに、大変邪魔な存在だったのです。

そんな中で、かつて 20 章では、イエスさまとユダヤ人指導者たちとの間で、ある問答がありました。イエスさまが民衆に神の福音を語るのは、何の権威で教えているのか。誰の許可でやっているのか、と問いただしたのです。

それは根本的には、「イエスという人物は何者か」という問いに他なりません。

その流れの中で、いくつかのやり取りがあった後、41～44 節でイエスさまは、ご自分が何者であるかについて、このように語っておられました。「ダビデの子についての問答」とあるところです。

文章が少しややこしいところだったのですが、そこをもう一度見てみたいと思います。

「イエスは彼らに言われた。「どうして人々は、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。ダビデ自身が詩編の中で言っている。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするときまで」と。』このようにダビデがメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」

イエスさまが、ダビデ自身が詩編の中で言っている、として引用されているのは、今日読まれた旧約聖書の詩編 110 : 1 のことです。

旧約聖書の時代から、メシア、つまり救い主は、イスラエルの王であったダビデの子孫から生まれる、という預言がありました。そしてイエスさまは、確かにダビデの子孫であるヨセフの子として、この世にお生まれになりました。しかし、イエスさまはここで、ご自分は、単なるダビデの子孫としてのメシアではない、ということ語られたのです。

なぜなら、来たるべきメシアを、ダビデ王は詩編の中で「わたしの主」と呼んでいました。ですから、遣わされるメシアは、王であるダビデが、主人と呼ぶ者。ダビデ王以上の者である、ということです。

そしてダビデは、その来たるべきメシアは、「神の右の座に着くお方」だと言っています。つまり、神と等しい者であると。

だから、メシアとして来られたイエスさまは、まことのメシアであり、かつ、神と等しい者、神の権威を持つ者なのだ、ということをお語りになったのです。

まことのメシアであり、まことの神の御子である。これが、イエスさまがどなたか、何者か、との問いの中で、これまで示されて来たことでした。

<お前はメシアか>

しかし、ここでまた、最高法院のメンバーは、イエスさまに問うのです。「お前がメシアなら、そうだと言うがよい。」

この質問がなされたのは、それが本当に真実かどうかを真剣に問うためではありません。彼らは最初からイエスさまを、神からのメシアとは思っていません。ここではイエスさまを、神を冒瀆した罪で有罪にするために、「そうだ」という答えを言わせたいだけなのです。

…イエスさまは、ずっと、「そうだ」と言っているのです。すべて、預言によって語られ、御業によって示されてきた通りなのです。

それを信じず、受け入れず、一方的に敵対しているのは、人々の方です。

イエスさまはそれをよくご存じでした。ですから、「わたしが言っても、あなたたちは決して信じないだろう。わたしが尋ねても、決して答えないだろう」。そうお答えになったのです。

<神の子>

ところがイエスさまは、ここで同時に、ご自分が何者であるかを、決定的にお示しになりました。先ほど出て来た 20 章の、メシアについての問答のところでも引用されていた、詩編 110 : 1 を、ここでまた、ご自分のこととして再び語られたのです。

「しかし、今から後、人の子は全能の神の右に座る。」

今から後、というのは、十字架の死と復活の御業を成し遂げた後、ということです。「人の子」という言葉は、これまでイエスさまがご自分を指す言葉として使ってこられました。

「人の子は、全能の神の右に座る」。これは、イエスさまが罪の贖いを成し遂げて、復活させられた後、天に上げられ、全能の神の右に座る。つまり、全能の神と等しい権威、ご支配、力を持つ者となられる、ということです。

神の御子の身分を捨て、栄光を捨て、低く降り、貧しく、小さく、弱くなり、苦難の主の僕として、すべての罪人のために、贖いの十字架の死を遂げられるイエスさま。そのようにして、誰よりも最も低く降ることによって、救い主となられるイエスさまです。

そのすべての御業が成し遂げられた後、父なる神さまは、この方を死者の中から復活させ、天へと高く上げ、再びすべての神の栄光をお与えになります。イエスさまはそのことを、これから後、ご自分の身に起こることとして語られたのです。

これははっきりと、ご自分が、全能の神と同じ権威と力を受けるべき者である。つまり、神の御子である、ということをお語りになっていることになります。

もうはっきりしました。それで、最高法院の者たちは言ったのです。「では、お前は神の子か」。いよいよです。イエスさまがここで「わたしは神の子だ」と言えば、自分を神と等しい者にしたと言って、神を冒瀆した罪で有罪にすることが出来ます。

これに、イエスさまはこうお答えになりました。「わたしがそうだとはい、あなたたちが言っている。」ちょっと分かりにくい答えです。しかしこれは、口語訳聖書では、「あなたがたの言うとおりでである」と訳されていました。どちらにせよ、事は明白でした。

ここは、よく見てみると、イエスさまの口からは、言葉として「神の子」という言葉は出て来ていません。しかし、ご自分は神の子である、ということをお明かにしておられます。そして一方で、人々の口からは「お前は神の子か」との、真実に迫る言葉が発せられました。しかし、それは字面だけの、口先だけのことでした。そこには信じる心も、求める心も、一切ありません。神の子かも知れない、というような思いも、期待も、微塵もありません。

人々はこのようにして、自分たちの欲望に従って、神さまの真実を歪め、まことのことを告げているイエスさまを裁いたのです。神の御子を、一方的に罪に定めたのです。

「これでもまだ証言が必要だろうか。我々は本人の口から聞いたのだ」。イエスは、自分が神の子であると認めたぞ。…それはまことのことであったのに。真実であったのに。人々はそう言って、神が遣わされた神の御子を、自分たちの思いを貫くことによって、否定し、冒瀆し、裁いたのです。

ここには、神さまの御心に背き、逆らい、自分こそ正しいと信じて、自己中心的に歩もうとする、人間の罪の姿。神に造られた人間が、その神の真実を受け入れず、それを歪め、裁き、有罪にするという、まことに恐ろしい罪の姿が顕わにされているのです。

<問われるわたしたち>

「あなたはメシア、救い主ですか」。「あなたは神の御子ですか」。

イエスさまに対するこの質問は、本来、人の存在を懸けた、人生を懸けた、命を懸けた、最も深刻で重大な質問なのです。

わたしのどうしようもない罪を、手に負えない罪を、代わりに担って下さるのは、あなたですか。決して赦されることのない罪を贖って下さるのは、あなたですか。滅びの死の他に行き先がないわたしを救い出し、命を得させて下さるのは、本当にあなたですか。わたしの命を、人生を、すべてを、愛して下さり、「よし」として下さり、始めから最後まで守って下さるのは、あなたなのですか。あなたを信じて、あなたに委ねて、本当に良いのですか。

イエスさまに、「あなたがメシアですか。あなたが救い主ですか」と問うことは、そのように、わたしの存在をイエスさまに懸けるべきかどうかを問う、一世一代の質問なのです。

この問いを真剣に問う者に、救いを心から求める者に、イエスさまは、問われます。

「あなたは、わたしを何者だと言うのか」。あなたは、わたしを救い主だと信じるのか。

この方が救い主なのだろうか。そう問いかける時、わたしたちは、イエスさまから問い返されるのです。「あなたは、わたしを救い主と信じるか。」わたしたちは、質問することではなく、このイエスさまからの問いに答えることを求められているのです。

しかし、わたしたちは何の手掛かりもなく、闇雲に信じろ、受け入れろ、と言われていたわけではありません。

まずイエスさまは、ご自分がまことに神の御子であり、救い主であることを、示して下さいました。旧約聖書の時代に、神さまの御言葉によって預言されたことを実現し、ご自分が何者であることを示し、明らかにして下さいました。

そしてイエスさまは、すべての救いの御業を、成し遂げて下さいました。すべては既に与えられているのです。あなたを救うために、わたしは神の身分を捨て、まことの人となった。あなたの苦しみや痛みをすべて負った。あなたのすべての罪を負った。そうして、わたしの命を、あなたのために与えた。だから、あなたは罪の赦しを与えられる。神と共に生きる命を与えられる。永遠の命と復活の約束を与えられる。神があなたを愛している。聖霊があなたと共にある。わたしがあなたのためにすべてのことを成し遂げている。

…わたしたちには、もう、この救いの恵みが、はっきりと示されているのです。この救いはすでに成し遂げられ、いつでもわたしたちに与えられようと、目の前に差し出されているのです。わたしたちが頑なな心を開き、イエスさまこそ、わたしの救い主であると信じるならば、自分が握りしめていたものを手放し、神さまの方を向いて、救いの恵みを受け取りたいと願うならば、わたしたちはそれを、溢れるほど豊かに受け取ることが出来るのです。

神さまの方からは、必要なことは、すべてわたしたちに示して下さいました。そして、いつも御手をこちらに向かって開き、愛の眼差しで見つめ、帰って来たら走り寄って抱きしめようと、わたしたちを受け入れて下さる準備を整えて、待って下さっているのです。

あとは、わたしたちが、この恵みを受け入れるか。告げられ、示されたことを信じるか。神さまを信頼して、自分を委ねるかどうかなのです。

神さまに対して失礼な言い方になるかも知れませんが、わたしたちをお造りになり、命を与え、愛して下さいている神さまは、信頼に足るお方です。わたしたちが救いを求め、命を預け、人生をより頼んでいくに十分なお方です。

神さまがそのようなお方であることを、神の御子イエスさまが、地上の歩みにおいて、わたしたちに示して下さいました。貧しい者、小さい者と共に在り、病を癒し、罪人を招き、敵対する者のためにさえ、自分の命を惜しまずに与え、愛し抜いて下さるお方です。

神さまは、わたしたちを罪から救い、生かし、神さまと共に生きる者とするためなら、どのようなことでもして下さいます。それは、ご自分の愛する独り子イエスさまの命を、わたしたちの罪の贖いのために、与えて下さるほどなのです。それほどまでに、わたしたちを愛しておられるのです。

神の御子イエスさまは、その神さまの御心を実現するために、私たちに対する愛のゆえに、苦しみも、裁きも、十字架の死をも、受け入れて下さったのです。

むしろ、この神さまの他に、十字架と復活のイエスさま以外に、わたしたちが依り頼むべきところはありません。

「あなたがわたしの救い主ですか」。「あなたは神の御子ですか」。

イエスさまに、そうわたしたちが問いかける時。本当は、わたしたちこそ、十字架に架けられ、復活なされたイエスさまが、あなたのためにそれを成し遂げたことを信じるか。イエスさまが、あなたの救い主であることを信じるか。語られて来た神さまの御言葉を信じるか。なされてきたすべての神の御業が、あなたの救いのためであったと信じるか。そう、問われているのです。

わたしたちは問う者ではなくて、この神さまからの問いに、答えるべき者です。

わたしたちは、イエスさまの御前で、心から「あなたは神の御子、わたしの救い主、イエス・キリストです」と告白する者になりたいと願います。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたの御心を受け入れない人々が、自分の思いを貫くために、神の御子、救い主であるイエスさまを裁き、罪に定めたことを聞きました。わたしたちもまた、示された神さまの真実を、自分の望むように歪め、否定し、神さまを訴え、罪に定めるような、恐ろしい罪を犯す者であることを覚えます。

しかし、そのようなわたしたちの罪の只中にこそ、罪の赦しを得させて下さるイエスさまの十字架が立てられました。どのような悲惨な罪の果てにあっても、神さまの御許に立ち帰らせて下さる命の道が、イエスさまによって拓かれたことを感謝いたします。

イエスさまこそ、わたしの救い主です。わたしたちのために、まことの人となられた、神の御子です。聖霊によって、わたしたちの心を開き、導き、信仰を告白する者として下さい。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。

【讚美歌】 300 「十字架のもとに」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讚美歌】 24 「たたえよ、主の民」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。アーメン